

桜蔭俳話会 十月句会 (第三五九回)

平成二十九年十月二十八日(土)

大塚・歳勝土遺跡(横浜市都筑区)で吟行。

句会場は横浜市歴史博物館研修室。

【推薦句】

空つぼの高床倉庫小鳥来る

秀一

【鑑賞】

米や雑穀が何もないという空虚感を、この森に小鳥が戻ってきてくれたことへの安堵感が、程よく埋めている。掲句はまさに今を詠んでいる俳句である。

復元の住居の匂ひ秋湿り

ヤエ子

【鑑賞】

嗅覚(匂ひ)と「湿り」は良く合う。敷いていた葎等の間から土の湿った匂いがたちこめる。

【添削句】

渡来人住みぬし遺跡ちちろ鳴く

明美

【理由】一

確かにそういう事実もあったかもしれない。この句の硬直感は、「渡来人」にある。また、「住みぬし」と「遺跡」はおなじこと。使う言葉を整理し選択する必要がある。また、原則として一句に動詞は一つ。

【添削案】

渡り来し人の住みぬし昼の虫

竪穴の茅の温もり秋日和

ツル子

【理由】

「温もり」と「秋日和」が同方向を向いている。

【添削案】

竪穴の茅の温もり秋の雨

蚯蚓鳴く古代遺跡の宴かな

かほる

【理由】

「遺跡の宴」は上手い把握である。古代人も時には宴をしたのであろう。遺跡の宴でもよいが、その遺跡にいたはずの古代人に夢をさせて、次のように刷ることもできる。

【添削案】

蚯蚓鳴く古代の民の宴かな

スロープの古代へ続く秋の風

かほる

【理由】

丘の斜面をスロープと表現し、今いる現代も過去に続いているという把握は良いが、「続く」の置かれている位置が不安定である。

【添削案】

続きたるスロープ古代へ秋の風

空濠に風の仕掛けて秋の声

才美

【添削案】

空濠へ風のからかひ秋の声

一

新蕎麦やしの笛の音を聞きて待つ

友子

【理由】一

「音」に「聞こえる」は使わない。

【添削案】

新蕎麦やしの笛の音高まりぬ

古民家の標となるや柿の照る

才美

【添削案】

古民家の標となりし子守柿

保母さんを離れぬ園児木の実降る

才美

【添削案】

保母保父を離れぬ園児木の実降る

新米の倉庫につける鼠除け

眞壽

【添削案】

新米や倉庫につくる鼠除け

古の重き板戸の秋の暮

ツル子

【添削案】

いにしへの板戸重たし秋の風

新そばや民家に響く笛の音

ヤエ子

【添削案】

新蕎麦や民家つらぬく笛の音

民族のルーツの始点暮の秋

明美

【添削案】

民族の系譜の始点暮の秋

大屋根の茅ととのいて柿紅葉

ツル子

【添削案】

大屋根の茅ととのへり柿紅葉

団栗や踏む道いつばいを除けきれず

友子

【添削案】

団栗や道一杯のおせんぼ

スニーカーの掴む秋風埋葬丘

才美

【添削案】

スニーカーの埋葬の丘秋の風

新そばや板の間座る待ち時間

かほる

【添削案】

新蕎麦や板の間にある待ち時間

ラグビーのボールつなぐ子紅葉降る

ヤエ子

【添削案】

投げ合ひしボールの一つ紅葉降る

(文責・代表 増田守 欠席投句 古野明美、
荒木ツル子)